

見立てにおける愛着理論の観点の適用について : おそれ型の事例を通しての試論

工藤, 晋平
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/874>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 3, pp.129-136, 2002-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン :
権利関係 :



見立てにおける愛着理論の観点の適用について

—おそれ型の事例を通しての試論—

工藤 晋平 九州大学大学院人間環境学府

An application of attachment theory's viewpoints to "mitate" — an attempt through a case of fearful style —

Kudo Shinpei (*Graduate school of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

This article discusses an application of attachment theory's viewpoints to assessment of client, especially to "mitate" (Japanese term which means temporary assessment) in an early phase of psychotherapy. Attachment theory understands an individual's pattern of relationship as an attachment style. The AAI by Main et al. (1985) is mostly used for its assessment, which analyzes contents and ways of conversation about past attachment relationships to understand individual's patterns of relationship. Szajunberg (1997) also pays his attention to therapist's feeling, that is, counter-transference in psychotherapy. These viewpoints can be applied to the process of "mitate". Kitayama (1996) discusses "mitate" in psychotherapy emphasizing the importance of understanding client's object relations and its connection to problems, and its sharing with client. He calls this process as "model making". By presenting a case of "fearful" style, the process of model making through the viewpoints of assessment of attachment style is discussed.

愛着理論と見立て

愛着

臨床心理学的観点と発達心理学的発展の歴史を持つ愛着理論はBowlby (1969/1982, 1973, 1980) の着想により始められた, 子どもの主要な養育者 (通常は母親) に対する「情緒的な絆」である愛着に関する研究である。その研究の中でBowlbyは「揺りかごから墓場まで」の愛着関係の発達や変化と, 特に安定した絆が形成されなかった際の精神病理学的な影響について豊富な資料と知見とを提出している。

Bowlbyによれば, 不安や危険にさらされた際に母親への接近を図り, 母親からの保護を求め, そのことで身の安全を図るようなシステムが幼児には生得的にあるという。母親の適切な反応や応答によって, その安全性の感覚は幼児の中に内在化されるが, もしも失敗した反応が続くと, 個人の安全感は損なわれることになる。永続する拒絶や拒否, あるいは受容と拒絶との一貫性のなさのために, 幼児は母親との間で安心や安全を得ることが難しいとの予測を持つようになるのである。このような母親への愛着は不安定な愛着と呼ばれ, やがてそれは困難が生じた際の自己の不安定さや他者の頼りなさ, 世界の救いのなさとして幼児の中に取り入れられていくとBowlbyは考えていた。母親との間で形成される愛着の安定性, 言い換えればそのつながりの確かさを問題とし, その脅かされたところに精神病理学的な影響を見ていたのである。

成人の愛着スタイル

愛着の発達に関してBowlbyは幼児期から成人期までの広い期間を視野に入れながら, 幼児期の愛着関係が後の他者との関係を予測すると考えていた。幼児期の愛着はAinsworthら (1978) のStrange Situation法によって3タイプ (あるいは4タイプ) に分類にされている (Table 1) (Goldberg, 2000) が, 1980年代後半以降Bowlbyの仮説にしたがって, 成人の愛着スタイルについても研究が行われてきた。Mainら (1985) やHazan & Shaver (1987) らに代表されるような研究者がこうした問題に取り組んでおり, 諸家の間でその方法論や愛着スタイルとして実際に取り上げている中身にいくつかの相違を含みながら, 幼児期の愛着パターンに相当する個人差がおおよそ認められている。

ところでBrennanら (1998) はBartholomewら (1990; 1991) の研究に注目し, それまでAinsworthらの分類に慣習的にしてきた成人の愛着スタイルの分類基準に, 関係への不安, つまり他者と親密になり, またその関係を維持しようということへの不安と, 関係からの回避, つまり他者との親密さの回避や拒否といった2つの軸を持ち込んだ (Figure 1)。この中で安定型, 軽視型, とらわれ型は従来の分類においても取り上げられてきた。軽視型と呼ばれる人々は, 愛着対象から拒絶される不安や怖れを感じず (=低い不安), なによりも愛着関係を否認, 軽視し, 親密な関係を攻撃的に拒む (=高い回避)。他方とらわれ型の人では, 他者との親密な関係を希求しそれが無くなることへの不安を強く持ち (=高い不安), 常に他者との関係を維持し, 距離を近づけようとする

Table 1 幼児の愛着スタイル (Goldberg, 2000)

Secure(B) 安定型	養育者を「安全基地」として利用する、養育者がいるときには自由探索できる、分離に際しては苦痛を感じたり感じなかったりするが再会時には肯定的に迎える、苦痛などときには接触を求め、落ち着き探索に戻る。健常児の55-65%。
Avoidant(A) 回避型	養育者には最小限にしか関心がないように見える、せわしなく探索する、分離における最小限の苦痛、再会時の養育者の無視あるいは回避。健常児の20-25%。
Resistant/ Ambivalent(C) 不安定型	最小限の探索、養育者へのとらわれ、落ち着くことの困難、再会時接触の求めと抵抗、怒るか非常に受身的。健常児の10-15%。

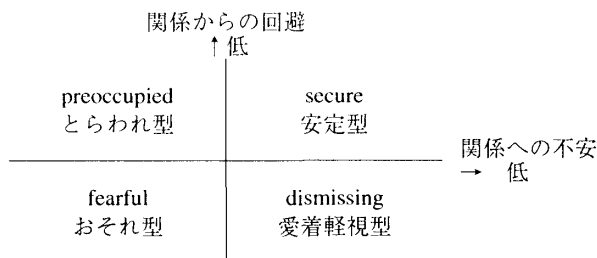


Figure 1 Brennannら (1998) による愛着スタイルの分類

る (=低い回避) と考えられる。関係への不安は容易に怒りを引き起こし、自分を不安にさせた対象にそれが向けられる事になる。

おそれ型だけがこれまでの研究では取り扱われてこなかった彼らの独自の分類であるのだが、本研究では特にこのスタイルに注目している。こうした人々は、一方では軽視型の人々のように表面的には他者から一定の距離をとり、親密な関係を持たないという特徴 (=高い回避) を持ちながら、他方ではとらわれ型の人々のように親密な関係を求め、他者から拒否される不安を感じており (=高い不安)、愛着やつながりを求める気持ちは失われていない。むしろそうした関係を何とか維持するために、自らの苦痛や葛藤、不満などを自分の中に抱え込み、他者に向けないように抑制しているのである。換言すれば、軽視型の人々がアンビバレンスを拒否し、とらわれ型の人々が愛と憎しみのアンビバレンスにあるのに対して、おそれ型の人々は接近と回避のアンビバレンスに揺れているとも言えるだろう。

愛着スタイルの理解のための方法

こうした個人の持つ愛着スタイルを理解する試みとしてMainら (1985) はAAI (Adult Attachment Interview) と呼ばれる半構造化面接を開発し、その逐語分析に見られる過去の愛着関係、特に両親との関係の語り方に注目をしている。彼女らによると、安定型の人々が文脈からそれることなく、良いことも悪いことも十分な根拠を伴って報告するのに対し、軽視型の人々は問題のない、理想的な親の姿を口にしながらも、具体的な事実をあげず、あげたとしても理想的な姿とは矛盾する姿を語るという。その語り方も、短く、抽象的で、他者の接近を回避している。とらわれ型の人々は逆に、過去の関係の否定的な側面の詳細に感情的に巻き込まれ、その語り方も時に一貫性が失われ、前後の文脈から大きくそれてしまうこともありえるという。このように過去の愛着関係について語ることは、記憶の上での愛着対象への接近であり、何を語るかではなくそれをどう語るか、その語り方が、実際に対象を求め、接近をはかる際のパターンや、対象とのつながりの確かさと平行しているとMainらは言うのである (遠藤, 1992; Hesse, 1999)。

Szajnborgら (1997) も意味記憶 (全体的、抽象的記憶) とエピソード記憶 (具体的記憶) という形で、この想起される対象の抽象的な姿と具体的な姿の異同を取り上げ、さらにより臨床的な観点から「今、ここ」での関係におけるTh.の感情からの愛着スタイル理解について論じている。軽視型の人々との間では、無感動でぶっきらぼうな目の前の姿と家族らからの外傷的な歴史についての情報との間の矛盾に悩まされ、CI.との間に情緒的な隔絶を感じる。そしてとらわれ型の人々ではCI.の重要な人物の誰がTh.に転移されているのかが分からなくなり、あるいはCI.の感情の激しさのために面接の継続に不安を感じるという。

こうした研究にはおそれ型のCI.についての記述は含まれてこなかったが、いずれにしても個人の愛着スタイルを理解する方法の1つとして、問題や過去について語る、その語り方や「今、ここ」でのCI., Th.双方の感情の在りようが注目されているのである。

モデルメイキングにおける愛着スタイルの利用

愛着理論はこれまで主に発達心理学的な発展をとげてきていたが、近年その源流である精神分析との再接近をはかろうとする動きを見せている (e. g., Sable, 2000; Fonagy, 2001)。本論文もそうした流れの中で愛着理論の研究の成果を、改めて臨床の場に取り入れ、両者の交流を図りながらより立体的にCI.の姿をとらえようと試みているものであるが、特にそうした観点から面接の初期におけるモデルメイキング (北山, 1996) への適用を考えている。

Gabbard (1994) や北山は力動的精神医学や精神分析的な観点から、精神療法を開始する際の診断面接において、個人がこれまでに培い、現在においても作用している個人の関係のパターン、すなわち対象関係を把握することの重要性を論じている。個人がどのような症状を持ち、どのような診断名に分類されるのか、といった観点からだけではなく、そのような症状を持つに至った個人の歴史やその意味、あるいはその背景となるパーソナリティに注目する診断面接を、Gabbardらは医学的診断と対比させ力動的診断と呼んでいるが、対象関係の把握はその1つとして注目されているのである。北山はその見立て論において、より積極的に繰り返される関係のパターンへの注目を行い、見立てを未知のCIの問題を「仮にそれとみなして、その扱いをする」ものとして、次の点を強調している。つまり、個人の過去の親や他者、あるいは世界との関係のあり方を見立てること、同時にそうした対象関係と現在の問題との関連とを見立てること、そしてそれをTh.の理解としてCI.と共有すること、である。この作業は見立てとしてのモデルを作るという意味で「モデルメイキング」と呼ばれ、そのプロセスにおいて関係のパターンと問題との関連に（その時点での）1つの形が与えられ、同時にCI.と共有されるのである。それが以降の治療や面接の基盤となり、あるいは話し合われるテーマとなり、さらにはTh.とCI.との間で起きている関係について考える枠組みとなっていく。筆者が愛着理論の観点を利用するのも、このモデルメイキングの側面においてであり、愛着理論における愛着スタイルという個人の記述を、いわばモデルメイキングのためのモデルとして用いながら、CI.への理解と関わりに役立たせようとしているのである。そしてそのアセスメントのために、問題や過去について語るCI.の、その語り方に注目しようとするのである。

ところで、先にあげたMainらを中心とする愛着スタイルの3タイプ（安定型、軽視型、とらわれ型）は発達心理学だけではなく、臨床心理学や精神医学近縁の領域においても取り上げられ、論じられることが多かった。また、AAIに関する研究を用いることにより、モデルメイキングのための愛着スタイルのアセスメントを論じることもある程度可能であるだろう。しかしBrennanらのおそれ型は、成人の愛着研究においては比較的新しい分類法から生じたものであり、またその方法が質問紙によるものであるということもあってこれまで注目されることは少なかった。そこで本研究では事例を取り上げながら、面接場面におけるこのおそれ型の愛着の歴史、語り方、およびTh.-CI.関係における感情等に注目し、その特徴を探り、同時にこれまでの他のスタイルに関する研究を利用しながら、モデルメイキングにおける愛着理論の観点の適用を図ってみたいと思う。

事 例

Cl.: 25歳 女性 抑うつ神経症

職場での対人恐怖的な訴えで来談し、本人の希望によりDr.を通じてカウンセリングの依頼があったが、仕事の都合で定期的に休みをとることが難しいとのことであったため、当初は問題の整理と現実的なサポートを中心とした関わりを考えていた。しかし実際にはすぐに仕事をやめており、それにもなってカウンセリングに導入している。心理テストの結果からは他者の視線に敏感で人との衝突を避けるといった所見が得られており、本人も「当たってます」と言う。（「」はCl.の言葉、〈〉はTh.の言葉）

1～3

主訴について訊ねると、職場で誰かが舌打ちしたり笑ったりする声が自分に向けられているのではないかと気になり、嫌われてないか考えてしまい、恐くて仕事に行けないことを訴える。うつむきがちに苦痛な表情を浮かべ、途切れ途切りに言葉を選ぶように喋るが、つかみ所が無い感じがする。言いたいことをまとめるのに精一杯でTh.にどう伝えるかまでは気が回っていない感じを受ける。「人と何を話したらいいのかわからない。なんか話すことを考えてると考えが止まってしまう」と口にするCI.に〈話そうとすると説明することがいっぱいあって、そのところどころだけが出てしまうので相手にはその流れがわからないんですね〉と補うと、顔をあげ「そうですね、そんな感じです」と表情を緩ませる（# 1）。人に相談しても考えすぎだよと言われると語るが、それが理解してもらえないことであるということに認めるのには抵抗を示す。〈理解してもらえない〉って言うのも嫌な人みたいですけどね〉と付け足すと少しだけ緊張が緩み、「みんなと悩んでることが違う」「自分の考え方が変わらないとどうしようもないようなことで悩んでる」と続ける。母親にも相談するが考え方を食べるように言われ、〈話しても分かってももらえたり解決したという感じがしないんですね〉との言葉に感触を確かめるように「うん…話しても変わらない」とうなずく。

当初カウンセリングは仕事の都合に合わせて、ということだったが、結局休んでいるとみんなに迷惑がかかるからと、身を引くように退職してしまう（# 2）。しかしまたすぐに仕事をしようとするCI.に〈自分を見つめ直す時間を〉と返すと「嫌なことを考えたくない」と抵抗を示す。高校の時にいじめられたことがあった、学校が変わった頃から周りの人が気になりだした、とも言うがそれ以上は触れられない。時間がたつて視野を広げれば傷が小さくなることを期待してもいたが、うまくいかず、「成長が止まってる」感じがする。人に注意されると自

分の全人格を否定されるようで落ち込むことや、そのために「自分らしさがない、周りの言うことを聞くだけ」であること、また「自己主張が苦手」で先に進めないと振り返る（#3）。父親のいない家庭で母親が厳しかったとも口にするが、それ以上は言わない。

時には笑顔も見られたが、面接中は沈んだ表情や苦痛な表情が多く、Th.から言葉を返しても無反応であったりじっとこちらの様子を見つめるように見つめるようなところもあった。Cl.の問題について人とぶつかるのが苦手なこと、自分の思いをどう取り扱い、どう言葉にするかが問題であることなどを確認しながら、思ったことを自由に話し、それについて一緒に考えていくことを提案した。言いにくいことを言えるようになること（#1）を目標とし、不満や言えないことがあってもそれを抑え込んでしまいやすいから、余計にそれを面接の場で話してほしいことも伝えた（#3）。

#4

小3の時に両親が離婚。父親の亭主関白が原因で、『信頼されてないのか』『何のために一緒になったのか』という思いを募らせることになったと母親は言うらしい。Cl.自身は小さい頃の父親の記憶はあまりなく、いくつかのエピソードを覚えているだけで、父親への印象は悪くないと語る。母親は以前はパートをしていたが、それだけでは経済的に追いつかなくなって夜の仕事も始めた。父親からの仕送りもあったらうけど「自分を高校にやり、兄を大学にやったんだからすごいと思う」と母親について述べる。現在他県にいる兄とは「小さい頃良くケンカして、その分今は仲がいい」「言いたいことが言える」と語り、お互いに母親に言えないことや恋愛の相談をよくするとのことだった。今の悩みについても話をよく聞いてくれて「そんな人もいるよ」って言ってくれる。「兄が聞いてくれるのは適当に聞いてるからですかね」と笑うなど、両親の離婚が話題になったにしては明るい雰囲気の中でTh.にはそれが不思議だった。

#5～7

〈小さい頃のことを〉と生育歴をとろうとすると、あまり覚えていないと言いながら、Th.が励ますと思う以上に詳しく語りはじめ、そのことがCl.に苦痛を引き起こしていくことになる。

3歳の時にA県からB県に転勤。母親がなじめず父親を残しA県に戻り、6歳の時には父親も帰ってきた。B県で覚えていることを尋ねると「家の壁の向こうが原っぱになっていて、兄はそれを乗り越えて向こうに遊びに行ったけど、私は取り残されてさびしかった」と語る。小3の頃に両親は離婚し、まもなく母親は夜の仕事を始める。Cl.が学校から帰る時間と母親が仕事に行く時間がほ

ぼ同じで、ほとんどすれ違い。帰ってくるのを夜中まで待っていることもあった。母親はお店に来てもらうために昼間にお客さんと出かけることもあって、休日までいないこともあった。

小4の時には学校の行事に参加するはずだった母親が当日になって姿を見せず、この時もお客さんと出かけていたことを後で知る。「みんなお母さんが来て一緒にやってくれるのに…さびしかったですね、やっぱり…」と涙をかべる。母はお金のことで苦労させなくなかったって、確かに苦労はしなかったけど、でも「やっぱりそばにいて欲しかった」。父親がいないことが嫌で誰にも話せなかった、何で離婚したんだらうって思ってた。「母親が仕事に行くのがさびしかった」。中学の時母親が結婚を考えていた男の人に家庭があることを知って別れ話を切り出したら、家にきて言い争っていたことがあった。「私たちに向かって『おまえ達の母親とホテルに行ったこともあるんだぞ』とか言ったりもして」「最低、と思った」。

「その頃から母親に何も相談しなくなった。大人の汚い側面を見たように思って距離を取るようになった」とうつぶいたまま言う（#6）。母親について、他にも友達や先生との間に入ってきてトラブルになりそうになったエピソードを語る。

同じころ学校でヤンキーの人がタバコを吸ってるのをCl.が先生にチクったというウワサが立ち、側を通ると急に悪口を言われたり、こちらを見ながら話をされたり、そこにCl.の名前が出たりした。友達に相談もしたけどどうにもならず、相手への怒りで何とか自分を支えていた、と言う。高校に入っても何か周りに言われてるような気がして、「もういいや」って夏休みの後から行けなくなった。友達が電話してきたりすることもプレッシャーで、「勉強について行けないから」とか言い訳してたけど、自分でも何で学校に行けないのか分からないのに説明なんてできない、と漏らす。

Th.の励ましに応じて過去を語るが、次第に重苦しさに包まれ、その空気のままセッションが終わり、#7の面接の始めに「昔のことを話すと自分が惨めになる」「自分の中でいつも引っ掛かっているところ。何かあるとすぐにそこに戻ってしまう」「過去を振り返るっていうのは私には合わないと思う」と途切れ途切れの言葉で訴える。たどたどしく語るCl.の言葉の重さにTh.はCl.を傷つけている思いにとらわれ、胸が重くなる。「でもつきあっている彼に『前を見て』って言われて、そうしようと思うけど」と言葉を詰まらせる。Cl.に苦痛な思いをさせてしまったことを詫びながら、Cl.自身どうするのがいいのか分からないでいることや苦痛を感じながらも言えなかったことを取り上げると「(Th.を) 傷つけるだろうな、というか嫌な思いをさせてしまうかもしれないと思った」と話す。

自分が惨めになる、「昔のことを話すと自信がなくなっていく」と語るCI.に、これまでの傷ついた体験がまだCI.を妨げているのではないかということ、そのために過去のことを整理することは必要なことだと考えていること、一方でそこまでつらい思いでやらなければならないことではないかもしれないことなど、Th.なりの考えを告げるのを顔をあげてじっと聞いている。そして、最終的に#3で確認したことと合わせて、言いにくいことを言葉にしたことを改めて取り上げ、もしも同じように過去に触れることがあるときにはその限界をCI.の言葉で言ってもらおうというやり方を取ることを確認した。

考 察

見立てへの愛着理論の適用のための観点について考察を加える前に、本事例においてTh.が行った見立てについてまとめておきたい。主訴に関してみられているようにCI.には対人恐怖的不安が見られ、そこには怒りや自己主張を抑え込み、苦痛を抱える姿が見られていた。苦痛や怒りを表すことは拒絶への不安を喚起するものであると同時に、他者を傷つけることでもあり、そのために否定的な感情は自己のうちに抱え込まれるようであった。こうした現在の関係のあり方には小さい頃の出来事や特に母親との関係による影響が見られ、頼れない母親と苦痛を抱えるCI.の姿が語られている。そうした過去および現在の関係においてCI.は感情を言葉にすることに困難を覚え、そのために会話が途切れ、さらに関係の不安を持つことになったのだろう。Th.はその理解を#3と#7において言いにくいことを言葉にできない、という形で伝え、そうした否定的な思いを言葉にできるようになることを目標として取り上げた。そしてそれが面接の中でも問題となっていくことにも触れていた。

この見立て／モデルメイキングを、本事例では特に愛着スタイルのアセスメントを中心とした愛着理論の観点を通して行ったのであるが、ここではそれを語られたもの、その語り方およびTh.-CI.関係におけるTh.の感情という側面から考えてみたい。そこからどのようにCI.のおそれ型にあたる関係のパターンが浮かんでくるか、そしてそれが関係の深まりにおいてどのように転移されるのかについて論じてみたいと思う。その際に比較によってその特徴をより明らかにするという意味で、他の愛着スタイルについても触れていきたい。

語られたもの

すでに述べたようにおそれ型の人の特徴として、拒絶への不安による接近と回避のアンビバレンスが考えられている。本事例においても他者との関係に悩まされながら、そのアンビバレンスを自分の中に抱え込み、耐えることに困難になったCI.の姿が垣間見られ、「嫌われてい

ないか」「どう思われているか」といった不安や、そのために他者から距離を取り、苦痛を背負い込むあり方が語られていた。怒りや自己主張は抑制され、こうした心情が理解されないことについて非難することも難しかった。こうした特徴がおそれ型の愛着パターンを思わせるのだが、おそらくこうした人にとって怒りや自己主張は、拒絶の不安を呼び起こすものなのだろう。そしてその抑制は同時に他者を守る試みとしての意味も持ち合わせているのだろう。自分の思いやネガティブな感情によって、他者を「傷つけ」「嫌な思い(#7)」をさせることを恐れ、環境の側の傷つきを思いやり、怒りや主張を自己の内に閉じ込め、そのようにしておそれ型の方は環境の傷つきやすさに傷ついているのかもしれない。罪悪感や対人不安の強いある種の人たちがそれをもたらず関係から抜け出せないのは、拒絶する対象をそれとして見ることが(傷つきやすい)環境への攻撃になるからなのかもしれないとも思う。母親への非難をためらいがちにでも口にしたり、過去においては「最低(#6)」と思えたCI.にそこまでの困難は見られないが、いずれにしても怒りや攻撃性や非難、自己主張は他者(および自分)の目から隠され、同時に、あるいはそれゆえに接近と回避をめぐるアンビバレンスが見られるのだろう。

このようなCI.のおそれ型の愛着スタイルには、生育歴で語られているように母親との関係をめぐる葛藤が影を落としていることが推察される。母親が家にいなくて「さびしかった」思いを抱え、母親の帰りを「夜中まで待っていた」CI.にとって、母親の大人としての世界はあまりに「汚い」世界であった。おそらくそこで愛情を求めたCI.の思いは傷つけられたであろうし、母親を愛情にに応じてくれる対象としてみることも困難となったのであろう。友人関係における母親との葛藤にも、期待に応えてくれない母親像があらわれているが、それでも母親を責めることができなかったのは、そこに母親を求める気持ちが残されていたからだし、今でもそれは残されているのだろう。怒りによって母親を破壊することは自分を破壊することでもあり、怒りは自分の中へ閉じこめられるしかない。残されたのは頼れない母親と傷ついた自己なのである。

いじめの経験が、はじめは怒りによって自分を支えることができたにしても、やがて力尽き、自己や外界への無力感へと変わっていったことは容易に想像できるし、このような経験もまたCI.の不安と回避の傾向、あるいは傷つきやすさを生み出す要因となっただろう。頼れない母親がいて、友達も助けにならない中でCI.の安全・安心感を保証する対象がいなまま、苦しみを抱え、他者から距離を取らざるをえなかった歴史が見い出される。もしかするとそれは「取り残された」幼少期に既に起きていたことなのかもしれない。

とらわれ型の人においてはこうした親の態度や対人関係は強い怒りや恨みを引き起こし、それは自己の内にとどめられることなく、外に吐き出される。おそれ型の人と同様、関係への不安を抱えながらも、否定的な対象像が語られ、その対象に向けられた怒りや不満などの否定的な感情は抑え込まれないのである。軽視型の人ではむしろこうした対人関係の問題が不安として語られることはなく、自分のうまくいかない姿を語ったとしても知性化や合理化が加えられるだろう。他者には怒りや不満や敵意が向けられやすいが、それは軽蔑や見下す態度としてのそれであり、とらわれ型やおそれ型の人のように愛情を求めて応えられなかった怒りとしてのものではない。他者を求める気持ちは切り捨てられ、その価値は貶められるのである。

CI.の語り方とTh.の感情

過去や現在の関係のパターンを苦痛を浮かべ言葉を選びながら語る、その語り方にもCI.なりの姿が映し出されていて、それはTh.との関係を反映するものであると同時に、CI.の愛着スタイルについての理解にも手がかりを与えてくれていた。接近と回避のアンビバレンスを語るCI.は、人と「話すことを考えてると考えが止まってしまう」と述べながら、Th.との間でもポツリポツリとしか語れないように自身の問題や苦痛を言葉にすることに困難を覚えていた。Th.にしてもCI.の苦痛は感じられても、それがどのように生じているのか、何がCI.を苦しめているのか、職場でどんなことが起きていて、どんなふう不安を引き起こすのか、そうしたことが分からずにCI.の体験をうまく理解できなかった。感情は言葉にならず、物事の詳細は失われ、情緒的な苦痛だけが浮かび上がり、かといってその感情がTh.にぶつけられることもない。おそれ型の人にとっては、往々にして大切なことを語ることが困難であり、言葉は感情の中に埋もれてしまうのだろう。感情を言葉にし自己の内面を他者にさらすことは、拒絶をめぐる葛藤を引き起こし、そのために言葉は失われるのかもしれない。そのようにしてコミュニケーションは途絶え、そのことが関係への不安を強め、不安は再び言葉をうばい結果として自己永続的なループ(Collins & Read, 1994)が形成されるのだろう。

過去や現在の個人の姿をその語り方とともに眺める視点をMenninger (1969)やMaran (1992)、北山(2001)は洞察の三角形、時間の三角形と呼んでいるが、語られた接近と回避のアンビバレンスに加え、面接場面でのこうした困難とから、Th.はおそれ型の愛着パターンを推測していた。そのような関係のパターンを想定し、そこにCI.自身の言葉も取り入れながら、面接の場でも思いが言葉にならないこと、そのために言いにくいことを言うことが目標となること、についてCI.と話していた。そ

れが本事例におけるモデルであり、伝えられた見立てであった。

本事例においてはさらに生育歴を語ることにCI.の強い情緒的葛藤の再燃が見られており、CI.におそれ型のパターンをもたらしたもう1つの関係のあり方が見られている。愛着理論の観点から言えば、そうした葛藤の再燃が引き起こされるのは記憶および対象への接近がはかれる時であり、1つは過去、特に生育歴について語る時、もう1つは面接場面でのTh.との関係の深まり、北山に従えばCI.との関係が築かれていく「コンタクトメイキング」の側面においてなのだろう。接近と回避のアンビバレンスにあるCI.は、初めのうちは過去について語ることに抵抗を示していた。過去への接近は葛藤への接近として回避されるのだから、おそれ型のCI.にとってそれは攻撃的な拒否ではなく、拒否することへの苦痛を含めての抵抗であった。そして生育歴の聴取においてはTh.の励ましに応じてその回避を捨て、苦痛に耐えながら過去を語ることになる。そこにはTh.の求めを拒否することによってTh.が傷つくことに配慮する姿が見られると同時に、そのために自分を犠牲にするあり方が見られる。不安と回避によるパターンを進展させながら、他者から求められた際には怒りや自己主張を抑え、自分を合わせ、そのことが苦痛となり、あるいはそこで見せたくない自己まで晒してしまい、恥じてしまう関係が見られるのである。それが生育歴の聴取を通じてのCI.の語りの「重苦しさ」であり、#7における抵抗はその反応であったのだろう。

CI.の傷つきや恥に直面したTh.は戸惑い、同時にCI.を傷つけたものとしての自己を発見することになったが、それはCI.の傷つきが投げ込まれたものとも解釈でき、このような形でCI.の怒りや苦しみを伝える関係がそこに展開していたとも言える。過去への接近とTh.との関係の深まりという局面において、おそれ型のCI.の語れないものは、転移-逆転移という形で関係の中に投げ込まれるのだろう。面接の経過にしたがって、語られることの具体性が問題となり、治療者との関係に深まりがみえるときにそれぞれに固有のパターンが「今、ここ」でも展開するのであり、それもまた見立てのための1つのプロセスとなるのだと思う。

とらわれ型の人であれば怒りは怒りとして、不安は不安として口に出され、状況は細かく、しかし時に一貫性を欠き、場面を次々に変えながら語られる。対象や状況のネガティブな詳細にとらわれ、おそれ型の人に比べれば言葉があふれてきて収めることが困難となるだろう。それは治療者の側に、話についていくのが困難な感じや、あるいはそうした形で治療者に苦痛を訴える姿に話を抑制したくなる感じが引き起こされるかもしれない。軽視型の人にとっては、心理面接という状況においても

愛着に関連した情緒は切り捨てられ、問題を自分の不安や苦痛などと結びつけて語ることは拒まれる。愛情やそれをめぐる不安は弱さであり、軽視型の人にとって重要なものは甘えや愛情に依存しない強い姿なのである。治療者はおそれ型の人のように接近や理解が困難である感じを受けるものの、そこにはより積極的、あるいは攻撃的な拒否や回避が感じられる。情緒的な接近は攻撃の対象となる。

傷つける対象を引き受けること

本研究の目的はモデルメイキングにおける愛着理論の利用にあったため、治療的な示唆やそのプロセスは描いていないが、おそれ型の人を理解のために1つだけ本事例から学べることを記したい。#7においてCI.によって示された抵抗はTh.に強い罪悪感や戸惑いを引き起こしたが、それは傷つきやすいCI.を傷つけたTh.を発見したためである。CI.自身の傷つきやすさは環境の傷つきやすさとして投影され、そのために怒りの表出は回避され自己が傷つけられる。怒りの向けられるべき対象はそれとして触れられず、ただその結果としての傷つけられた自己だけが他者(Th.)の目に映ることになる。逆に言えば、ここにおいてCI.の繰り返される関係が展開するのであって、持ち込まれた傷つき—傷つける、あるいは回避し—拒絶する関係や、その結果としての無言の非難—罪悪感の関係が展開することになるのだろう。それは繰り返されてきた関係の劇化であり、そこで本事例のようにその苦痛を口にすることはCI.なりの挑戦なのである。

こうした局面にあつて我々が罪悪感にとらわれ、CI.の傷つきに傷つけば、CI.も再び環境の傷つきやすさにさらされることになる。かといってCI.への傷つきに無関心であれば、拒絶する対象を再び繰り返すことになるだろう。こうした人々と向きあひながらすべきことは、ただ投げ込まれた傷つきや怒りや攻撃に生き残る(Winnicott, 1965; 北山, 1985)ことであり、近づけば傷つけるというアンビバレンスに耐えながら、その関係について話し合うことなのだろう。おそれ型の人と出会うとき、我々はその隠された怒りや傷つける対象を引き受け、特にその罪悪感を生き残らなければならない。そしてそのために、繰り返される関係をそれとしてとらえ、それについて話し合うためのモデルメイキング/見立てという作業が求められることを、改めて考えるのである。

モデルメイキングのためいくつかのポイント

本研究では愛着スタイルの1つとしておそれ型を中心に考察をしたが、ここでモデルメイキングのためのモデルとして愛着スタイルを用いるための観点について簡単に羅列しておきたい。現在の段階はまだ試論であり、今

後この観点を洗練していくことが課題として残されている。

安定型 過去の愛着関係について良い面も悪い面も共に評価できる・記憶への接近が情緒的な混乱をもたらさない・Th.を安全基地として利用できる

とらわれ型 過去の関係の悪い側面の詳細を多く語る・情緒的に巻き込まれ、話の一貫性を保つことが難しい・時に怒りの表出が強く見られ収まりがつかない・知的側面や観念レベルの活動が抑えられる・苦痛を訴え、Th.からの共感、保護を求める

軽視型 理想的な関係を語りながらその詳細には触れようとしない・知的、観念的な語り方が強く情緒的な要素が切り離されている・弱さを認めない・Th.から距離を取ろうとし攻撃的に拒絶、回避する・時にTh.の側に敵意的感情が感じられる

おそれ型 過去の想起を回避する・親密な関係を求めながら拒否されることをおそれる・想起や接近に苦痛が伴う・自己主張や怒りを抱え込む・自己への原因帰属を行いやすい・感情を言葉でうまく表せない

最後に

ここで述べた愛着スタイルのアセスメントについて、その判別が困難である場合もあるだろう。しかしそのアセスメントは面接や関わりの入口なのであり、見立てのプロセスが治療のプロセスと歩みを並べることが思う時、CI.とともに歩みを進めるためにも、正確なアセスメントをめざすよりも、見立てながら関わり、関わりながら見立てるという態度を保ち続けることが必要だと筆者は考えている。そのために、それはあくまでも見立てであり、モデルであることを強調しておきたい。

愛着理論は臨床から生まれたものであるにも関わらず、これまで特に成人の面接の中で論じられることは少なかった。そこには様々な理由があるが、最近の動向として精神分析への再統合、再接近が図られているし、ここでも愛着理論を対象関係論に組み込むような形でこれを論じた。今後の課題としてこうした動向にも触れながら、モデルメイキングの側面だけではなく、コンタクトメイキングの側面、あるいは治療全体を通しての愛着理論の観点の利用について考えてみたい。

参考文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E. & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of strange situation*. Hillsdale, NJ Erlbaum.
- Bartholomew, K. 1990 Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal relationships*, 7, 147-178.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. 1991 Attachment styles

- among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Bowlby, J. 1969/1982 *Attachment and loss. Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books. (黒田実郎訳 1976 母子関係の理論: 愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss. Vol. 2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books. (黒田実郎訳 1977 母子関係の理論: 分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss. Vol. 3. Loss: Sadness and depression*. New York: Basic Books. (黒田実郎訳 1976 母子関係の理論: 対象喪失 岩崎学術出版社)
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. 1998 Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In Simpson, J. A. & Rholes, W. S. (Eds.), *Attachment theory and close relationships*, New York: Guilford Press.
- Collins, N. L. & Read, S. L.J. 1994 Cognitive representations of attachment: The structure and function of working models. In Bartholomew, K. & Perlman, D. (Eds.), *Advances in personal relationships*. Vol. **5**, 53-90 London: Jessica Kingsles
- 遠藤俊彦 1992 愛着と表象—愛着研究の最近の動向—: 内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観 心理学評論 第**35**巻第2号 201-233.
- Fonagy, P. 2001 *Attachment theory and psychoanalysis*. New York: Other Press
- Gabbard, G. O. 1994 *Psychodynamic psychiatry in Clinical Practice: the DSM-IV edition*. Washington, DC: American Psychiatric Press. (権成鉉訳 1998 精神力動的な精神医学 その臨床実践 [DSM-IV版] 理論編 岩崎学術出版社)
- George, C., Kaplan, N., & Main, M 1985 *An adult attachment interview: Interview protocol*. Unpublished manuscript, Department of psychology, University of California, Berkeley.
- Goldberg, S. 2000 Introduction. In Goldberg, S., Muir, R., & Kerr, J. (Eds.). *Attachment theory: Social, developmental, and Clinical Perspectives*. Hillsdale, NJ: London.
- Hazan, C. & Shaver, P. 1987 Conceptualizing romantic love as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- Hesse, E. 1999 The adult attachment interview: Historical and current perspectives. In Cassidy, J., & Shaver, P. R. (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications*. 395-433. New York: Guilford Press.
- 北山 修 1985 錯覚と脱錯覚 岩崎学術出版社
- 北山 修 1996 見立ての訓練に向けて—医師の場合— 精神療法 第**22**巻第2号. 14-18.
- 北山 修 2001 精神分析理論と臨床 誠信書房
- Maran, D. H. 1980 *Toward the validation of dynamic psychotherapy: A replication*. New York: Plenum (鈴木 龍訳 1992 心理療法の臨床と科学 誠信書房)
- Menninger, K. 1958 *Theory of psychoanalytic technique*. New York: Basic Books (小此木啓吾・岩崎徹也訳 1969 精神分析技法論 岩崎学術出版社)
- Sable, P. 2000 *Attachment and adult psychotherapy*. London: Aronson
- Szajnberg, N. M. & Crittenden, P. M. 1997 The transference refracted through the lens of attachment. *Journal of the American Academy of Psychoanalysis*, **25**(3), 409-438
- Winnicott, D. W. 1965 *The maturational processes and the facilitating environment*. London: Hogarth Press. (牛島定信訳 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社)